

期 昭和五十九年十一月十三日〜十二月一日
於 図書館三階閲覧室（本館）

連歌

連歌は、一人が、上の句（五・七・五）を詠むと、他の一人が、下の句（七・七）をつけ、またその逆に、下の句をつくり、上の句をつける合作のもの（短連歌）で、初めは、和歌の余興として、娛樂的なものであったが、後に独立の文学として確立するに至った。一般的に連歌とは、上の句と下の句を相互に連環させて、五十句、百句（百韻）と詠み続ける鎖連歌（長連歌）をいうのである。この長連歌は、多人数で共作するのが本来であるが、後に単独で試みるようにもなり、これを独吟という。今回は、その代表的な長連歌の幾つかを紹介する。

(1)

水無瀬三吟百韻 複製版
宗祇・肖柏・宗長 共詠
写本一卷 二十八纏 東京 日本古典文学刊行会 昭和四十九年刊（複製日本
古典文学館第一期） 岡田利兵衛氏所蔵 伊地知鉄男著
原本三室町中期写 岡田利兵衛氏所蔵
この三吟は、長享二年（一四八八）、宗祇六十八才、その弟子肖柏四十六才、
宗長四十一才の三人の共詠した作品で、宗祇の「下草」の詞書によって、後鳥羽
上皇の離宮趾であった水無瀬の御廟に奉納した法楽連歌であることが知られてい
る。

(2)

湯山三吟百韻 複製版
宗祇・肖柏・宗長 共詠
写本一卷 十六纏 東京 日本古典文学刊行会 昭和四十八年刊（複製日本古
典文学館第一期） 別冊解題・釈文 伊地知鉄男著
原本延徳三年（一四九一）、岡田利兵衛氏所蔵
有馬の湯山で、楽しみながら共詠したもので、「水無瀬三吟」の三年後、師弟三人が、湯治場である
表的な作品である。

(3)

紹巴独吟千句
里村紹巴詠
写本一冊 半紙判 横綴 十三行書き 巻首「永禄六年十二月十四日称名院殿二
七日御追善為三条西殿右府入道殿」 奥書に天正十一年の浄教坊本を以って転写
の旨記載あり。年代不明。
里村昌休に学び、里村姓に改めた。この「称名院追善独吟千句」は、本姓松村氏、
の作品といわれる。

(4)

名所百韻 美濃判 十一〜十四行書き 奥書、内題なし 篁園文庫（竹内篁園）
写本一冊あり。
内容は、宗祇、宗安、兼載の各名所歌で、源氏歌をも加えた一巻である。
賦したものので、宗祇、源氏歌は、兼載など作者の名を冠した名所歌の集成である。

○ 篁園文庫（竹内篁園）蔵書印



(5)

連歌新式抄
 里村紹巴著
 外題「連歌新式増抄」
 版本二冊（上・下巻）
 美濃判 萬屋作右衛門
 寛文五年（一六六五）刊
 外題「連歌新式増抄」
 成立、連歌を吟詠する
 ためを守るべき規定や故実を、
 条目を立てて記してある規定書（連歌式目）の一つである「連歌新式追加並新
 式今案等」を、一句一節ごとに注釈したもの。

（特殊資料室）